

文化を創る

——水戸芸術館の誕生と（元）水戸市長・佐川一信

東京大学大学院学際情報学府博士課程

日本学術振興会特別研究員(DC2)

清原悠

1 目的

近年、アートを利用した地域・都市戦略が盛んだが、安定した文化政策を推進するには、制度創出の政治を考える必要がある。80年代の多目的＝無目的ホールに対し、現在は各芸術の専門館が重視されるが、その源流の水戸芸術館（1990年開館）はいかにして成立したか、そしてその活動の安定性を保障する文化1%予算などの制度はどのような背景から生まれたのかを、当時の水戸市長であった佐川一信の思想と経験から分析するのがこの報告の目的である。

2 方法

そこで、データとしては佐川一信の著作物や彼に関連する活動の記録、ならびに水戸市の都市データを取り上げ、それらを歴史社会学の方法で分析していく。

3 結果

分析の結果、以下の3点が明らかになった。第一に、佐川一信が芸術・文化を重視したのは、東京圏に組込まれない、自己完結した地域文化圏の必要性を佐川自身の社会運動の経験から感じた為であった。第二に、それはかつて労働法の専門家として佐川が学んだ欧米の自主管理社会論を踏まえたものでもあったことが挙げられる。第三に、水戸芸術館と文化1%予算といった現在に通用する文化政策・制度の創出を80年代において政治的に可能にしたのは、1960-70年代に展開した東京・横浜の革新自治体の問題意識と政治手法を佐川が継承したところからであったことが挙げられる。

4 結論

佐川は「水道をひねっても文化は出てこない。水戸市は下水道の整備も行うが、文化の整備も行う」と述べたが、水戸芸術館や文化1%予算などはそれを体現したものであった。この文化政策は一つのモデルとして各地の自治体で参照されていった。この事例から得られるインプリケーションは、安定した文化政策・制度を生み出す政治（環境）とは何かを、文化社会学の問題として論じる必要があるのではないかということだ。近年の大阪の事例にみられるように、政治や経済の動向によって文化政策が翻弄されることは少なくないと言える（吉澤弥生 2011）。また、消費文化の称揚が都市におけるジェントリフィケーションをもたらし「都市に住み、働くすべての人々の恒久的な『場』を形成するための文化的な権利」（Zukin 2010=2013: 6）を結局のところ損壊させてしまう危険性を念頭に置くと、都市間競争における文化の称揚と異なる政治のあり方を論じる必要がある。

文献

Zukin, Sharon., 2009, *Naked City: The Death and Life of Authentic Urban Places*, Oxford University Press(=

内田奈芳美・真野洋介訳、2013、『都市はなぜ魂を失ったか』講談社。)

吉澤弥生、2011、『芸術は社会を変えるか？——文化生産の社会学からの接近』青弓社。

佐川一信、1994、『水戸発 地方からの改革』日本評論社。

伊藤裕夫・松井憲太郎・小林真理編、2010、『公共劇場の10年——舞台芸術・演劇の公共性の現在と未来』美学出版。